



とちぎの四季のキノコ

キノコでみる、季節の移ろい

「^{たけがり}茸狩や ^{あぶなきこと}あぶなきことに ^{ゆうしぐれ}夕時雨」(松尾芭蕉^{まつお ばしゅう})。キノコ狩りから帰るのがもう少し遅かったら、通り雨に降られるところだった、という晩秋の情景を詠んだ句です。「^{きのこ}茸といえは秋」というイメージは、昔も今も、日本人の心に根付いています。しかし、ほかの生き物が活発に活動する春や夏にも、キノコはたくさん生えます。生き物の気配が少ない冬にしか出会えないキノコもあります。栃木県の四季を彩るキノコを見てみましょう。

春のキノコ

寒さが緩み、おだやかな晴れの日と雨の日が繰り返されるような気候になると、春によく見られるキノコの発生が始まります。



ヌルデタケ

里山の雑木林で、コナラなどの広葉樹の枯れ枝に生える。傘は人の鼻のような面白い形。下側には孢子を出す小さな穴がたくさんある。



ヒトクチタケ

樹皮が残っているアカマツの枯れ木に生える。成熟すると下側に穴が開き、そこから出入りする昆虫によって、^{ほうち}胞子が運ばれる。



ミズベノニセズキンタケ

森の中のゆるやかな小川に浸かった枝から生える。半透明の、ゼラチン質のキノコ。まれにこのように、水中に生えることも(矢印)。



エツキクロコップタケ

地面に半分埋まった広葉樹の枝に生える。表面のひび割れや、縁の反り返りが特徴。触れると煙のように孢子を噴き出すことも。



オオズキンカブリタケ

アミガサタケの仲間。長い柄^えの先に、網目状のしわのある傘をつける。早春に、広葉樹林の斜面に生える珍しいキノコ。

街なかでも見られる春のキノコ



トガリアミガサタケ

春の訪れを告げる、街なかの木々の花や新緑。そこから視線を下げて地面を見てみましょう。

4月には、サクラやイチヨウの下に、トガリアミガサタケなどのアミガサタケの仲間が顔を出します。

5月になると、植えられたクワの木の下にはキツネノワンが、ウメやケヤキの下にはハルシメジの仲間が生えてきます。



キツネノワン



ハルシメジの仲間

夏のキノコ

梅雨の雨で森の地面は湿り、キノコが次々と発生します。特に、高気圧が強まり梅雨明けが近づく頃は、気温が高く湿気が多いため、秋と並んでたくさんの種類のキノコが見られます。



チチタケ

栃木県では“ちたけ”の愛称で知られる、良い出汁が出るキノコ。県内では8月初めと9月初めに多い。傷つけると乳液(矢印)を出す。



タモギタケ

県内では主にハルニレの倒木に生える。栽培品が売られている。噛みごたえのある食感と、濃厚な旨味が特徴の美味しいキノコ。



モエギアミアシグチ

県内では珍しいキノコ。広葉樹林に生える。柄が萌黄色で網目模様をもつことが特徴。毒があるので食べてはいけません。



オオカボチャタケ

ミズナラの大木に生え、県内では奥日光の森に多い。若いころは黄色だが、8月ごろに熟し、かぼちゃのようなオレンジ色に色づく。



コカンバタケ

ミズナラの枯れ木に生える、全国的に珍しいキノコ。傘の下側は、傷をつけると褐色に変わる。奥日光で見られる。



チョレイマイタケ

イノシシの糞のような菌系の塊(菌核)をつくり、そこから生える。この菌核は姿形から猪苓と呼ばれ、漢方薬に使われる。

虫から生えるキノコ 冬虫夏草

とうちゅうかそう



セミタケ

冬虫夏草は殺虫キノコとして知られています。主に、昆虫やクモなどの節足動物に寄生し、その体内で菌が増殖します。やがて寄生された昆虫は死に至り、死体からキノコが生えてきます。栃木県では梅雨の6～7月に多くの種類が見られ、セミタケのように身近な公園で見かける種類もあります。



ミドリクチキムシタケ



ハエヤドリタケ

撮影：荒井亮成



キツネノエフデ

はじめ2センチ程度の卵のような姿だが、熟すと卵を割って伸び出し、先の赤い筆のような形になる。



オオミノミミブサタケ

広葉樹林の地上に生える、ウサギの耳のような形のキノコ。根元には、ときに直径10センチに達する菌核が埋まっている。



秋のキノコ

秋雨前線がもたらした雨は、連日の真夏日で乾いた地面を湿らせ、地中の温度を下げます。この変化がキノコの発生を促します。当館が所蔵する県内産キノコの標本は、半数以上が秋に採集されたものです。



ベニテングタケ

主に奥日光で、シラカバの木の周りに生える。濃厚な旨味をもつが、この旨味が毒成分なので食べてはいけない。



コガネシメジ

ミズナラなどの広葉樹林に生える大型のキノコ。県内ではとても珍しい。長野県では食用として利用されている。



ソライロタケ

鮮やかなスカイブルーの珍しいキノコ。那珂川町で一度だけ見つかった。傷をつけた部分が黄色くなるのが特徴。



バライロシメジ

ピンク色の傘が美しい、珍しいキノコ。傷をつけた部分が黒くなるのが特徴。県内ではモミが多い林に生える。

とちぎのマツタケ事情



アカマツ林のマツタケ



コメツガ林のマツタケ



モミ林のマツタケ

秋の風物詩であるマツタケは、県内にも広く分布していました。しかし、アカマツ林の衰退が進むにつれ、その姿を見ることはかなり少なくなってきました。

マツタケはアカマツと共生しているため、アカマツが減ればマツタケも生えなくなります。県内のマツタケはこのまま姿を消してしまうのでしょうか？

しかし調査を進めると、県内では、実はアカマツ以外のマツの仲間とも、マツタケが共生していることが明らかになってきました。

例えば、奥日光の亜高山帯では、コメツガと共生してマツタケが生えています。

また、那須塩原市では、モミと共生してマツタケが生えている場所が新たに見つかり、2025年に学会で発表されました。

もしかすると、県内に生育するほかのマツの仲間も、マツタケと共生しているかもしれません。



アンズタケモドキ

フランス料理に使われるアンズタケの仲間。傘の裏側にひだがなく、平滑であることが特徴。コナラ林に生える。



ケロウジ

アカマツ林に生える。美味しいキノコであるコウタケに似ている。毒はないが、とても苦くて食べられない。



ニクアツベニサラタケ

広葉樹の枯れ枝に生える、深紅のキノコ。皿のような形をしている。県内ではやや珍しい。



アカエノズキンタケ

青緑色の傘と、オレンジ色を帯びた黄色の柄のツートンカラーが鮮やかなキノコ。ブナ林や亜高山帯の針葉樹林に生える。



冬のキノコ

低地では、厳しい寒さの中でも発生するキノコがあります。しかし、県内の低地は、季節風や冬晴れの影響で乾燥するため、種類は限られます。



ヒラタケ

撮影：細野天智

寒茸と呼ばれ、積雪のある真冬にも見られる。里山や市街地で、広葉樹の枯れ木に生える。栽培品が市販されている。



スギ黒点枝枯病菌

スギ林に積もった落ち葉から生える。生きたスギの枝に感染し、枝を枯らせてしまう植物病原菌。



ウロイボセイヨウショウロ

トリュフの仲間。コナラやシラカシの根元で見つかる。身近な公園で見つかることも。食べて安全かは今のところ不明。

ゆきぐされびょうきん

雪腐病菌：ガマノホタケの仲間

雪どけのころ、雪の下にあった芝生が枯れて、葉が地面にへばりつくように倒れている光景を見たことはありませんか？もしかすると、雪腐病菌という植物病原菌のしわざで枯れてしまったのかもしれない。

雪腐病菌とは、積雪の下で植物に寄生するガマノホタケの仲間などの総称です。雪どけ直後の奥日光では、枯れた芝生の上に、直径1ミリ程度の赤茶色の粒々が見られます。これが、フユガレガマノホタケの菌核です。

フユガレガマノホタケは、雪の下で植物から栄養を奪い、雪どけのころ、植物から得た栄養を蓄えた、菌核に姿を変えます。この菌核は暑さに強いので、夏を越すことができます。そして秋になると、菌核の上にピンク色の細長いキノコを生やし、胞子をばらまきます。



雪腐病で枯れた芝生



フユガレガマノホタケの菌核



フユガレガマノホタケのキノコ

撮影：星野保

いつでも見られる硬いキノコ



マンネンハリタケ



コフキサルノシカケ

サルノコシカケの仲間代表される、非常に硬いキノコは、硬質菌類と呼ばれます。中には、手で割ることが難しいほど硬い種類もあります。そのため、古くなってもなかなか腐らず形が残ります。

また、コフキサルノコシカケのように、年輪のような新たな層を作りながら、2～3年かそれ以上の年月をかけて成長する種類もあります。